文化芸術立国の実現のための懇話会（第 1 回）

平成 25 年 5 月 18 日

【近藤文化庁長官】　おはようございます。ただいまから，文化芸術立国実現のための懇話会第 1 回会合を開催させていただきます。

このたびは，大変ショートノーティスであったにもかかわらず，委員をお引き受けいただきまして，そしてまた土曜日の朝 10 時という，決して人道的とは言えない時間帯の会合に万障お繰り合わせの上御出席いただきまして，誠にありがとうございます。

もう会員の方々，委員の方々，自己紹介等々の時間は省かせていただきまして，できるだけ儀式を省いて，実質の方に重点を置きたいと思っております。

本日の進め方でございますけれども，私が進行役をやれというのが大臣の御指示でございまして，通常の政府の審議会等ですと，委員の方の互選という手続をとりますけれども，今回私が進行役を最初から最後まで務めさせていただきます。恐らく大臣の頭の中には，せっかくお越しいただいた有識者の方々ですから，司会役などをお願いするのではなくて，御意見をしっかり賜りたいということだろうと思います。

それでは，まず大臣から今回のこの懇話会の趣旨について，大臣の思いについて御紹介いただき，その後，河村次長から，既にお配りしてあると思いますが，たたき台の資料について御説明をさせていただき，その後，自由な議論にさせていただきたいと思います。

では大臣から，よろしくお願いいたします。

【下村文部科学大臣】　皆さん，おはようございます。今日は土曜日の午前中という時間にもかかわらず，文化芸術立国の実現のための懇話会に御出席いただきまして，誠にありがとうございます。文部科学大臣の下村博文でございます。これから，是非皆様方にも，自由な形で御議論をいただければ大変有り難いと思いますので，私もこれから座って挨拶をさせていただきたいと思いますが，今日は福井副大臣，そして丹羽政務官も同席させていただいて，議論，あるいは委員の皆様方のお話を伺わせていただければ大変有り難いと思います。

今回，私の私的な懇談会として立ち上げさせていただきました。理由は，これから日本が目指すべき方向性，安倍内閣のもとで経済再生と教育再生が内閣の最重要課題で，昨年までは少子高齢化の中で，我が国はもう未来のない沈みゆく国ではないかという悲観論が

まん延しておりましたが，政権奪還をし，今年になって，まずは経済再生によって国民の皆さんの期待感も大変増していると思います。私も，5 月の連休にワシントン，それからアイルランドのダブリン，またロンドンと行きまして，国内だけではなく，海外から日本に対する期待感，それは経済再生だけではなく，これから日本が先進国のモデルとして，いったん，20 年の経済低迷の中で，これからどうよみがえる国になっていくのかということに対する注目，期待感，それをひしひしと感じました。

これから日本が目指すべき方向性，それはもちろん経済に裏打ちされることが必要ですが，やはり文化芸術立国を目指していく，文化芸術において圧倒的な 2，000 年以上の歴史のある国が，これは近藤長官の言葉をお借りすれば唐の時代の長安，長安というのは，私もよく分かりませんが，文献によれば，東西の人的な文化芸術の交流で，その時代最も世界の中で繁栄し，世界中の方々が文化芸術を求めて行き交う都市であったということであるそうですが，是非これから，21 世紀日本をそういう国にしていく必要があるのではないかと思います。

モデルになるのはフランスだと思いますが，日本は，フランスの二番煎じのようなことではなくて，また過去のフランスのようないろんな，すばらしい遺産といいますか，歴史もありますが，日本はそれ以上に，これから，今現在の，あるいはこれから文化芸術を発信することによって，人が集まってくるような，そして，そこによってまた新たな文化芸術を創設していくような，そういう国を目指すことが大変重要ではないかと思います。

今年の文化庁の予算は，実は過去最高額で，1，033 億円で，しかし，対前年度比 1 億 4，000 万増ということで，実際のところは，過去最高といっても，この 10 年，20 年を見ても毎年 1 億円程度増えているかどうかということで，大きな予算の獲得にはなっておりません。本当にこれから文化芸術立国を目指すのであれば，対前年度比 1 億とか 2 億とかという話ではなくて，それこそ 2 倍，3 倍の額を獲得していくようなことでなかったら，それはもう，ただ声を上げているだけの話で，本当の意味での文化芸術立国にはなれないと思いますが，しかし，ただ予算を獲得するというよりは，逆に言えば何のためにその予算が必要なのか。こういうことを目指すための理念とか，ビジョンとか，方向性とか，そのために，国民の皆さんから御覧になっても，それは当然，そういうところにしっかり投資するべきだというものを創っていかなければ，それはただ，省庁の予算ぶんどり合戦のようなレベルからなかなか脱するような発信ができないのではないかということで，今日は，お手元にビジョンとして，「文化芸術立国中期プラン　世界トップクラスの文化大国に向

けたロードマップ」というものを，手持ちとしては用意させていただきました。

既に政府の方でも，内閣府の稲田特命担当大臣のもとで，「クールジャパン」ということで，作って準備をしているところでございますが，屋上屋を重ねることなく，飽くまでも我々の場合は，文部科学省の中の文化庁の中の位置づけですから，クールジャパンというのはもっと広範囲で，政府全体として取り上げることになっておりますが，この懇談会におきましては，文化庁というスタンスの中で，しかし，お手元の中期プランも，やはり今までの文化庁の範囲の中での発想ですから，ここにおられる皆様方から見るとまだまだ視野が狭いのではないか，あるいは物足りないのではないか，御覧になってそのように見られる方もおられるのではないかと思います。政府全体というわけにはなかなかいきませんが，しかし既存の文化庁の発想を更に抜け出す中で，これから文化芸術のあるべき形は何なのかということについて御議論いただきながら，それを今後の，端的に言えば来年度の概算要求にすぐ反映できるような形，そしてこれは中期プランですから，3 年，5 年以内にあるべき我が国の文化芸術立国というものはどういう形なのか。まさに 21 世紀における長安，それは必ずしも東京だけではありませんが，日本全体ということであると思いますが，世界中の方々が文化芸術を求めて日本を訪れる，ただの観光だけではなくて，実際にそういうアーティストとか，文化芸術を志す学生を含めて，あるいはもちろん，それを自分の目や耳で知りたいということも含めて，芸術的な方々だけではなく，一般の方々も含めて，是非そういう，日本に行ってみたい，まさに文化芸術のジパング，ジャパンということをこれから発信していくために，今日，各分野で，国内外でトップレベルの御活躍と，そして見識を持っておられます皆様方にお越しいただいて，いろいろな御提言をいただければと，そういう趣旨で第 1 回を始めさせていただきました。

先ほど申し上げましたように，端的に言えば，これからの概算要求の中にも反映していきたいと思っておりますので，だらだら議論すると，ここにおられる皆様方は大変お忙しい方々ばかりでございますので，とりあえずは今回と次回ということで限定しておりますが，場合によってはそれ以降も，もしお時間があって，そして御関心があって，そして更に議論が深まるということがあれば，継続も一方で考えていただければ有り難いと思いますが，とりあえず 2 回の中で取りまとめをするというタイムリミットを設けて，まずはスタートしていければということで今日は第 1 回をお願いしたところでございます。

限られた時間でございますが，そういうコンセプトの中で，今日既にお配りさせていただいていると思いますが，この「文化芸術立国中期プラン」にのっとって，あるいはこれ

以外のことでも結構でございますので，率直な苦言なり，提言なり，注文なり，あるいは先生方のビジョンなり，いろいろとお話をしていただければ有り難いと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

【近藤文化庁長官】　　下村大臣，ありがとうございました。それでは，御意見を頂く前に，お手元の資料 3 を事務局から御説明したいと思います。この資料は非常に幅広い視点に立ちまして，将来に向けての様々な選択肢を提示したいということで，準備させていただいたものでございます。それではその概要について，10 分以内で河村次長に説明をお願いいたします。

【河村文化庁次長】　　文化庁次長を務めております河村でございます。資料 3 について御説明申し上げます。座らせていただきます。

資料 3 は，下村文部科学大臣の指示のもと，2020 年を 1 つの目標年次に置き，我が国の文化力を増進するためのプランを描いてみたもの，いわば文化芸術立国実現のための下村プランの素案の素案でございます。ただし，中には実務的に一定の検討を経たものにとどまらず，今長官からも申し上げましたように，具体化には今後詰めを要するようなものも，施策の選択肢として含まれております。

1 ページ，表紙をめくっていただきまして，基本的な考え方ですが，我が国には有形無形の文化財，幅広い文化芸術活動が存在し，また長く行われてまいりました。こうした文化芸術の持つ潜在力が，現実の生活において国民一人一人や社会に広く浸透し，生かされる仕組みをつくり，日本再生の柱とすることが必要という課題意識を掲げております。

このためには資源の投入が必要でございますが，文化への支出は公共投資と同様の経済波及効果を持つことに加えて，国民の精神面に大きなプラス効果，つまり数値化になじまない，創造性の喚起ですとか，社会連帯といった付加価値を持つものだという認識を持っております。

その次のページに 2020 年での大きなイメージを掲げております。1 つ目の項目にありますように，国民が日本の文化に自信と誇りを持って，心豊かな生活を送ることができる。また，3 つ目の項目にありますように，世界から多くの方々が文化芸術の国として日本を訪れる，いわば世界の文化芸術の交流のハブとなるという大きなイメージ目標を掲げてみました。

その次のページに幾つかの具体的な姿を掲げておりますが，これは次ページ以降にも出てまいりますので，逐一は御紹介を控えさせていただきます。

その次の 5 ページには，先ほど申し上げました 2020 年の大きなイメージ，国民が心豊かな生活を送り，世界から文化芸術の国としての日本を訪れる方々が多くいらっしゃるというイメージを達成するための，文化力の強化についての流れ図を掲載いたしました。ここで 2020 年といたしておりますのは，現在の文化芸術振興基本法に基づく基本方針が 2015 年までということを 1 つの対象期間にしております。またその次の基本方針ということを考えますと，想定される対象期間がまた 5 年ということで，2020 年までを，先までを見た 1 つの想定期間としておいたものでございます。

2020 年までに強固な文化力の基盤を形成いたしまして，世界の文化交流のハブとしたいということなのですが，施策の考え方としまして，左側の欄にありますように，1 つは「人をつくる」，文化が創造的な人をつくるという面と，文化を担い，また国民とつなぐ人たちを育成し，確保していきたいという施策がございます。

2 つ目に，「文化で地域を元気にする」という観点から，大事な文化財の保存修理をしっかり行い，また文化資源を生かした町づくりが行われ，それぞれからの発信が行われていくという施策が必要と考えております。

3 つ目に，こうして我が国が世界の文化交流のハブとなる，発信，人的交流，また東京にとどまらず，国内様々な場所で文化のフェスティバル，イベントなどが行われていく，様々な文化資源が生かされているという姿を描くわけでありますけれども，これらを横断的に支える施設とか人的な組織，制度の整備も必要ということで，以降それぞれのページに施策の事項を掲げているものでございます。

1 ページめくっていただきまして，「人をつくる」という観点では，まず文化芸術で創造力豊かな子供を育てていく，これは子供の創造性を育成することとあわせて，文化芸術が鑑賞者にも育てられるものでございますので，将来に大きな鑑賞者を育てていくという面もございます。この子供の芸術鑑賞体験機会を抜本的に拡充できないか。

現在国で支えておりますのは，義務教育期間中 2 回弱ですけれども，この実演の鑑賞機会はもちろんのこと，良質の映像を活用した，IT 活用による，子供たちがその住んでいる地域にかかわらず，芸術に親しむ機会を大きく増やせないかということが 1 つの施策例でございます。

また専門人材の育成として，文化を身近にしてくれる人たち，プロデュースや教育ができる人たち，あとマネジメント人材を育成し，増やしていくことが望まれるのではないか。更に，もちろん芸術の担い手である芸術家，伝統文化の後継者の養成，次のページの項目

でありますが，芸術教育の充実や，トップレベルの芸術活動の支援，大学活用ということが重要かと考えているものでございます。

その次の「地域を元気にする」という観点での施策といたしましては，まず世紀を超えて受け継いでいくべき我が国の文化財，この保存修理や防災対策が，現状，ややというか，かなり後れがちになっているところがございまして，適正な周期でのきちんとした維持修理が可能となるような強化を図るべきではないかということであります。

また地域の文化資源，文化資源というのは芸術や伝統文化にとどまらず，暮らしの文化，文化的な景観，様々なものがあると思いますけれども，こうしたものを生かした町づくりが今各地で進められようとしております。こういうものを抜本的に支援し，またその都市間のネットワークが形成されて，世界へも発信していくような動きを強化できないかということでございます。

その次のページには，地域における文化芸術の担い手，劇場，音楽堂，美術館，博物館への支援，それからもちろん東日本大震災からの復興支援とあわせて，これからの危機管理としての非常災害対応の整備，また文化財を保存・修理するだけではなく，活用していくという視点を広めていくことが必要かということの項目を掲げております。

次のページでございますが，「世界の文化交流のハブとなる」ということで，この文化交流のハブという大きな目標を持続的に発展させていくことが必要と考えております。ここは，先ほど大臣からも言及がございました，我が国が強みを持つコンテンツのグローバル展開で経済成長を図るというクールジャパン戦略とも，かなり深い関わりがある施策でございます。

もともとの文化芸術は，観光や産業等への分野の波及力を持つものでございますので，クールジャパンとのかかわりで申し上げますと，前ページまでの施策も，文化芸術の中身や人材育成を通じてクールジャパンの基礎となるものでございます。

加えて，10 ページ，11 ページの施策は文化交流ということですので，日本人，外国人双方の精神的なプラス効果を目指すものでございますが，経済波及効果がもちろんあり，また産業振興への橋渡しという点から見れば，クールジャパン戦略にも大きく，また深くかかわるというか，資するものであると考えております。

重点施策的に申し上げますと，伝統工芸や芸能の海外発信を強化していくということでございます。現在行っている施策を広げるということもございますが，新たにプロモーションの映像制作ですとか，様々な場を広げていくことがございます。

また，丸の 3 つ目，これはメディア芸術ですので，見出しが伝統工芸のもとにありますとおかしいかもしれません，「メディア芸術の発信」という見出しをつけさせていただきたいと思いますが，それらを漫画，アニメ，あるいはゲーム，エンターテインメント，インタラクティブアートといったものを一層振興していき，発信するということがございます。

そのほか，様々な省庁との連携を行いながら，人的交流や，作品の海外への出展の支援をしてまいりたいと思います。我が国，日本文化の紹介ということにとどまらず，恐らく，商業ベースでのアートフェアへの出品支援も今後必要になってくるかと存じます。

また，このページの一番下の国内芸術フェスティバルですけれども，各地でトリエンナーレ，ビエンナーレといった美術展や芸術展，また音楽祭，お祭り，衣食住の文化を活性化していく試みがございます。こうしたことを大きく支援し，またネットワークを支援することで発信を強めたいということでございます。東アジア文化都市の試みということも始まります。

また，人の交流ということでは，レジデンスのプログラムの強化や，アジア諸国のアートにかかわる人材育成の支援もあろうかと存じます。

これらの人をつくり，地域を元気にし，文化交流を進めることを支えるものとして，最終ページでございますが，必要な施設の整備，組織の充実，制度の整備ということが，また中期的に必要になってくると考えております。国立の美術館，博物館，劇場の機能強化なども今後必要と位置づけております。

以上，御説明とさせていただきます。ありがとうございました。

【近藤文化庁長官】　ありがとうございました。それでは残された時間，1 時間半ほどございますが，委員の先生方から自由な御意見を賜りたいと思います。頂く御意見は，今御説明申し上げたプランへのコメントでも，あるいは御質問でも結構でございますし，あるいはこれを全く離れて，それぞれの持っておられるビジョン，思いといったものを御披露いただくことでも結構でございます。

念のため申し添えますが，この会議はすべて公開になっておりまして，カメラは先ほど冒頭だけで出ましたけれども，ペンの方々は入っていらっしゃいます。

それでは，どなたからでも結構です。御意見を賜ればと思います。8 人の先生方がいらっしゃいますので，とりあえず冒頭，最初にお 1 人 5 分程度で御感想を頂き，その後，後半は，その提起された問題等を中心に，あるいは大臣からも何かコメントや御質問がある

かもしれませんが，そういったものを踏まえた，よりフォーカスした深い議論に持っていければと考えております。

それではどうぞ，御意見を頂きたいと思います。福先生，どうぞ。

【福委員】　この頂いた資料の 5 ページにあります順番で考えると，一番目の「人をつくる」というのが基本的に私の専門分野ですので，この順番に従って最初に私がお話しさせていただきます。よろしいでしょうか。

【近藤文化庁長官】　どうぞ。

【福委員】　最初に 1 つお願いがあるんですけれども。

【近藤文化庁長官】　どうぞ，座って。

【福委員】　いえ，立たせていただいていいですか。三木谷さんにお願いがあります。三木谷さんも立っていただけますか。

【三木谷委員】　はい。

【福委員】　ちょっと横に出ていただいて。よろしいでしょうか。

【三木谷委員】　はい。

【福委員】　私はいろんなところでこのお願いをすることがあるんですが，少し後ろに離れていただいて。すみません。キャッチボールのまねごとをしていただけませんか。

【三木谷委員】　キャッチボール？

【福委員】　キャッチボールです。

【三木谷委員】　分かりました。

【福委員】　よろしくお願いします。（三木谷委員がキャッチボールのまねをする）ありがとうございます。どうぞお座りください。

今まで何人もの方にキャッチボールをしてくださいとお願いしてきましたが，みなさん「投げる」まねをされます。「受ける」格好をされた方は，1 人もいらっしゃいません。英語でも play catch と言います。このネーミングは，相手のこと，つまりキャッチしてくれる人のことを意識した，すばらしいネーミングだとおもいます。田中マー君がどれだけすばらしいピッチャーであっても，キャッチャーがいないと成り立たないゲームがキャッチボールです。

実は，芸術も全く同じです。でも，日本では「図画工作」と言いますように，これまでは，ほとんど創る人，つまり投げ手を育成してきました。今後はもっと受け手，つまり鑑賞者，あるいは文化の享受者を育てていく必要があるのではないでしょうか。それこそが

文化の需要の拡大につながると思っています。

日本のサッカー界はこの 20 年間ものすごく発展，盛り上がってきたと思うんですが，それはサポーターを育成してきたからです。アーティストにとっても，サポーターの有無は死活問題にかかわっています。

そのサポーターには，まず，ゲームを楽しんでいただきたい。私の専門であるアートの分野で言いますと，鑑賞を楽しむということです。ところが今まで，私たちは子供時代から，アートとの不幸な出会いをたくさんしてきました。「文化芸術立国プラン」には，「美術館での鑑賞の回数を増やす」と書いてあります。しかしそこでの経験が「さわるな，しゃべるな，走るな，感想文書かせるぞ」だったら，幾ら回数を増やしても逆効果になってしまうかもしれません。

イギリスの美学会の会長をされていましたハロルド・オズボーンという人がこんなことを言っています。「芸術鑑賞は知識の類ではなく，感情の放縦でもなく，獲得される技だ」。つまり鑑賞とは，目をあけていたら見える，あるいは知識があればできるというものではなくて，トレーニングして初めて獲得される技術だと言うことです。

美術系・デザイン系の大学は全国に 100 校以上あります。1 年間に約 2 万人の，アーティストやデザイナーの卵が世の中に巣立っていきます。しかし，鑑賞のトレーニング，あるいは鑑賞者を育てるためのファシリテーターを育てている大学は，実は日本にはほとんどありません。そうしたトレーニングをするために，同時に，鑑賞者と作品を結ぶファシリテーターを育てるために，私は大学で 1 年生の必修科目として，ACOP（Art Communication Project）という授業をしています。これはコミュニケーションを通した鑑賞教育で，同時に鑑賞を通したコミュニケーション教育です。観察力，批判的思考力，コミュニケーション力を養い，他者とともに生きる知恵を身につけることを目的としています。「観察力」「批判的思考力」，これらは美術の指導要領にある言葉というよりは，理科の指導要領に書かれているものです。

私のところにも，近年，全国の教育委員会や美術館からファシリテーターや鑑賞者の育成をお願いしますという要望がたくさんきています。それに加えて，ここ 5 年ぐらいは理科系の大学の人たちや歴史学の分野の人たちからの要請も増えてきました。私たちが行っているような鑑賞教育ととても似た方法は，ハーバード大学の医学部の医学生に対しても用いられています。ニューヨークでは警察官を対象に同様のトレーニングがされています。私たちも，看護師や，企業の人材育成もこれを使ってトレーニングしています。

ということで，今回 2 つお願いがあります。1 つ目は，鑑賞者とファシリテーターの育成を行う機関を増やして，育て方の方法の確立を是非ともこの「プラン」の中に，盛り込んでいただきたいと思います。

２つ目です。「プラン」の 4 ページ目に，文化芸術で，「創造力豊かな子供を育てる」と書いてあります。もちろん創造力も大切です。決して否定しているわけではありません。でもこの能力は実は，制作者，つまり投げ手に要求されている能力です。「発明とはこれまで存在しない何かを考えつくこと。発見とは，これまで存在していたことを認識することだ」と美術教育学者であるブルーノ・ムナーリは言っています。アーティストを発明家だとすれば，鑑賞者は発見家です。発見家に求められているものは，観察力，そしてイマジネーション，想像力です。この色は何を意味するのかな，この形は何を象徴しているのかな，あるいは作者は何を言いたかったのかなと想像しながら，思考することが鑑賞だと思うからです。ですので，芸術文化の享受者を育て，需要拡大を図るためにも，ここには想像力という言葉も是非入れていただきたいなと思います。私の経験からですけれども，観察力とイマジネーションを駆使して，作品を見るという訓練を受けた学生は，人に対して思いやりの心を持てるようになります。思いやりというのは，人の気持ちを想像することだからです。

信用と信頼は違うと思います。信用はものに対して，信頼は人に対してです。世界の中で，日本製品に対する信用は十分あります。もし芸術文化の受け手を育成することで，今申しましたような人材が輩出できれば，信用と同時に，信頼をも世界から得られるのではないでしょうか。

【近藤文化庁長官】　ありがとうございました。文化行政ではなかなか思いが至りにくいところ，非常に分かりやすく御説明いただきました。次はどなたでしょうか。どうぞ。呉先生。

【呉委員】　拓殖大学の呉善花です。私は韓国出身ですが，大学では国際学部に所属しており，日本の文化，日本の歴史の講義を担当しております。講義を受け持つことになったときには，私が韓国出身だということもあって，果たしてどれほどの学生が受講するだろうかと心配でした。それで開講となっていざ教室に入って見ましたら，大教室がすし詰め状態なので驚きました。

そこで学生たちに，なぜ国際学部なのに日本の文化，日本の歴史の授業をとったのかと聞いてみますと，何人かから「日本人が日本のことを知らないでは国際人とはいえないと

思う」と，いった答えが返ってきました。私の狙いもまさにそうだったので何かうれしくなりました。15 回ぐらいのカリキュラムですが，日本の文化・伝統などについて講義の回を重ねていきますと，だんだんと学生たちの目がきらきら輝いていくんです。また，毎回感想文を書かせているんですが，多くの学生が「日本人であることに自信が持てる」「生きがいを感じる」といった意味のことを書いています。私は，「生きることとは」というような話は一度もしたことがないですけれども。なぜ学生たちは，日本文化の講義を受けて生きがいを感じたり，目がきらきら輝いたりするのでしょうか。いずれにしても，多くの学生が興味津々で講義に聞き耳を立ててくれていることは確かです。

この数年の間，強く実感するようになったのは，日本人は「古きよき日本」を強く求めるようになっているのではないか，ということです。それで，大学には茶道部がなかったんですが，それならば私が茶道部を立ち上げようと思いまして，茶道部をつくったんです。主に留学生が入部したいといってくるかなと思いましたが，来るのは日本人学生がほとんどなんです。しかも男子学生がたくさん入ってくるんです。午後 1 時から夕方 6 時ぐらいまで，外から伝統流派の先生をお招きして行っています。みな最初は正座ひとつまともにできませんし，苦いお茶は好きではないとか，甘いお菓子を食べたいから入ったとか，いうんですけれども，やはり日本人なんですね，茶道には何か感じられるものがあるようなんです。それでいつの間にか皆が皆夢中になっていきました。「ああ，疲れた」とか言いながらも，これまでにない充実感が感じられるということです。そこまで熱心に取り組むんだったら授業にもそうしてほしいなと思いますけれども。私はほかの科目も受け持っているんですが，多くの場合，時間がたつにつれて学生たちの目はだんだん緩くなっていきます。ところが日本文化，日本の歴史の講義では全くそういうことがないんです。

いわゆる「自虐史観」というのでしょうか，戦後日本の教育現場では，日本の歴史・文化を否定的にとらえる教育が少なからず行われてきたと言われますが，授業の場で学生たちの話を聞いてそのことがよく分かったように思います。私の講義を受けて，初めて日本の歴史・文化に誇りを持つことができた，とレポートに書く学生がかなり多くいます。「なぜ高校までの授業ではこうしたことを教えてくれなかったのだろうか」といったレポートもたくさんあります。

最近日本では韓流ブームが盛んですけれども，これも日本人による「古きよき日本」探しの現象のひとつだと私は見ています。韓流の中には，韓国に入った日本流を韓国的にアレンジしたものがたくさんあるんですね。そのへんで，韓流に「古きよき日本」との共鳴

を感じる中高年の女性たちがたくさんいらっしゃるんだと思います。

【近藤文化庁長官】　　ありがとうございました。それでは山脇さん，お願いします。

【山脇委員】　　日本経済新聞の山脇と申します。今の呉さんのことに関連して申し上げたいと思うんですが，私は今回のこの資料を拝見して，すばらしいとは思うんですが，何もかもやってしまうと，限られた予算の中で結局は何も残らなかったということになると残念だと思うんですね。ですから，議論が収れんしていくかどうかは別として，1 つということではないんですけれども，数多くを求めない方がいいんじゃないかということをまず思っております。

そして今私は，日本人がやるべきことというのは，まず 1 つは，今呉さんがおっしゃったんですが，日本固有の文化というものをきちんと自分たちが知ることだと思うんです。例えば舞台芸術を例にとっても，長唄（ながうた）と清元と常磐津（ときわず）と，もちろん一中さんの一中節もそうですが，これの違いが分かる人なんて誰もというか，ほとんどいない，ここのメンバーでもどうでしょうかということなんですね。それはしようがないことだと思うんです。つまり教育されてきていない，それから聞いてきていないということなんです。でも，多分ピアノコンチェルトと，ピアノのソロ，それから協奏曲，オーケストラ，交響曲の違いはみんな分かったりする。これはやっぱり教育されてきているということなんです。そちらの西洋音楽の教育はもちろんすばらしくていいと思うんですけれども，日本の固有の文化を大人になるまで何も聞いたことがないというのは，もったいないことであると思っています。これは別に右傾化とか何とかということと全く関係なくて，日本の固有文化をきちんと知ること，守ること，そして発信していくことが，日本人が尊敬されていくことの 1 つにつながるのではないかと思っているんです。ですから，実は私は教育現場で，そういったものにいつも触れ合う時間が必要なのかと思っております。

それから，先ほど福さんから，美術館にただ行ってもしょうがないというお話があって，ファシリテーターの育成の重要性をおっしゃいましたけれども，もちろんなんですが，私は実は，ただ美術館に行く，ただ劇場に行くということも，子供のころには肝心なことだと思っています。自分なりのおしゃれをして劇場に行き，大人にまざって劇場でのマナーを知り，劇場の香りをかぐ，雰囲気に浸る。美術館も同じで，しゃべったらいけないところはしゃべったらいけない，そういうところに行くことが大切なことなんだと思っています。

アムステルダムの国立博物館，ライクスミュージアムの調査で，10 歳までに 3 回美術館

に行った人は一生行くという調査があるそうです。これはなかなか，日本ではやはりなされていないと思っておりますので，そういった意味では子供のときから，先ほど福さんが鑑賞者を育てることの必要性をおっしゃっていましたけれども，これは多分美術館に限らず，劇場もそうなんだと思うんですけれども，そういったところに子供のときから，そして特に伝統文化も含めて，多分能楽堂に行ったことがない方もたくさんいらっしゃると思いますが，能楽堂の静ひつなところに子供のときに身を置かせるとか，そういったようなことも私は必要なんだと思っております。

そしてもう一つ必要なのが海外発信なんですけれども，やはり海外発信というのは，漫画とかアニメーションは商業ベースに乗るんですけれども，舞台・美術・文学は商業ベースに乗らないので，これはやはり何らかの公的な助成が必要なんだろうと思っています。

この中になかったもので，今ちょっと申し上げましたが，文学ということも私は大きな必要性を感じておりまして，翻訳をすることはなかなか大変なことで，これは本当に商業ベースに乗らないことだそうで，民主党政権のときの仕分で，翻訳助成というものがカットされたと聞いておりますので，日本を知ってもらうことは非常に大切なことですが，それを文学というところからも知ってもらう，すばらしいツールだと思いますので，そういったことも国として考えていただければと思います。ざっとお話しいたしました。

【近藤文化庁長官】　ありがとうございました。おっしゃるとおり，うんと的を絞って，重点を絞って最終的には施策を進めたいと思っています。女性が 3 人続きましたが，どうでしょうか，男性，はい，一中さん。

【都委員】　すみません，これを皆様に配っていただいて。

一中節という，江戸時代からの三味線音楽をしております都一中と申します。都一中というのは一中節の家元名で，本名は違うんですけれども，藤堂誠一郎といいます。

今皆様のお手元にお配りして，実はこれは私が非常に感銘を受けた浮世絵なんですけれども，今まず福委員から，鑑賞者を育てるということがありましたが，そして山脇さんからもそういう，触れさせる，触れる機会をつくると。実は，一中節というのは元禄（げんろく）時代に京都で始まったんですが，18 世紀に入るとすぐに江戸に，初代のころから広めてまいりまして，3 代目都一中のころに「夕霞浅間嶽」という曲が，皆さんがそれを習うためにお稽古本を買うんですが，そのお稽古本が，江戸の家にない家がないと言われるぐらいに大ヒットしたんです。

その曲を今演奏しますと，多分皆さん 5 分で寝てしまう。ただ非常に高度で精ちな，深

い芸術的な曲なんですけれども，非常に静かで，山もなければ谷もない。淡々とした 30 分ぐらいの曲なんです。これが非常に，何百回も稽古して初めて私もその曲の価値が分かって，こんな深い表現力があるのか，先進性が高いこんな曲があるのかということなんですが，それを江戸の庶民の人たちがみんな愛好した。これは一体どういうことなんだ，こんな地味な，インパクトの弱い，しかし高度な難しい曲を，どうして江戸の人々はそんなに残らず愛好できたのかということ。

1 つは一中節，日本の音楽芸術はみんなそうなんですけれども，鑑賞すなわち稽古なんですね。今みたいにネットでダウンロードもできないし，iPod も CD もないですから，音楽を鑑賞することは自分が習うことでしかなかった。身近に，1 町内に 1 人ずつぐらい，必ずお師匠さんというものがいたので，それで必ず稽古して，稽古することが鑑賞。稽古していくと，おのずから一流の先生が目の前で自分のためだけに演奏してくれて，それを自分も声を出したり，実際に楽器を持ったりするわけですから，非常に理解が深まっていく。そうすると鑑賞力がおのずから増すわけです。鑑賞力が増す人たちが増えれば，おのずから専門家のレベルも上がってくる。いい加減なことでは許されなくなってくるという非常な相乗効果があったんですね。

なぜその地味な曲がそれほどまでに愛好されたのかなということがずっと疑問だったんですけれども，3 年ぐらい前に，今お配りしたこの絵に出会いまして，これは料亭四季いおりという，日本橋中洲にあった料亭を描いた絵なんですけれども，この川端，隅田川のほとりにあって，船が着いて，船から 2 人のお客が上がってきて，生け垣があって，松が植わっていて，遠くホトトギスを見ているんですね。立っているのは多分芸者さん，座っている人も芸者さん。その後ろに黒い長い箱が置いてあるんですけれども，これは三味線の箱なんです。三味線というのはこういう木の箱に入れて運んだので，それを運ぶ人を箱屋と言ったわけですけれども，後ろから仲居さんが飲物か何かを持ってきているという図なんですけれども，これは 1 つの都市環境を一部切り取っただけなんですけれども，こういう都市環境が当時の江戸の町では当たり前だったんです。どこへ行ってもそういう都市環境があった。そういうことを後々，イギリスから来た学者が，日本ほど美しく花をめでている国はないということで，ごめんなさい，もう一回，名前を忘れてしまいました。

【近藤文化庁長官】　　イザベラ・バード。

【都委員】　　イザベラ・バードさん。昨日長官に伺ったんですけれども。そういうことをレポートしている書物もあるぐらいなんですが，それで私は，世界のトップクラスの文

化立国を目指すということを読ませていただいて，江戸の町というのは，明治になってかなり破壊されました。そして関東大震災があり，東京大空襲があって，完膚なきまでに破壊されて，ほとんど江戸の町の情緒は残っていないです。室町以前は京都・奈良にその情緒が残っているのかもしれませんけれども。

それで僕が考えたのは，文化立国のためには，世界中に強烈にインパクトを与える，アピールできるものがまずなければならない。それは日本の文化にとっても非常に総合的な波及効果を持っている必要がある。そして，何よりも文化立国を目指す上は，担っている私たちの責任なんですが，文化の質を際限なく高めていかなければ，圧倒的に質が高いものでなければ，とてもこれは，世界にアピールしたら恥をかきますから，徹底的に質を高めることは担い手の義務だと思うんです。

そういうことを総合的にできる，集約する，また実現が比較的簡単であって分かりやすい，どうしたらいいかというと，こういう町を，この前有り明けの方に行って気がついたんですが，かなり空き地があったりしますので，ディズニーランドのように，江戸の町をこの浮世絵に基づいて忠実に再現する。それも質高く再現する。その中に，今の歌舞伎座に行ってみて分かったんですが，歌舞伎座は大き過ぎるんですね。経済効率を考えるとああなる，メトロポリタンもそうですけれども，本来の歌舞伎をやるサイズではないんです。金丸座で演奏してみて分かったんですけれども，今の歌舞伎座で演奏すると，役者さんが踊るときに，本舞台から花道に行くときに異様に曲をゆっくりにしないといけない。何でこんなにゆっくりにするのか不思議だったんですけれども，金丸座に行くとそんなことは必要ないんです。普通に本来あるべき演奏のテンポでやって，十分役者さんが花道に行くのに間に合う。そういうサイズというものがあります。

それはちょっと余談なんですけれども，そこにお茶室があったり，寄席があったり，今日の日本の精神文化の礎は，やはり江戸の文化だと思います。もちろん江戸の文化は，江戸時代にも源氏物語や伊勢物語が盛んに読まれたように，平安文化が非常に，室町文化も集約されております。そういう街並みを徹底したものを作って，その中で本当の，こういう浮世絵の世界にある芸術文化をやり，それからその中で，これを作ることによって伝統工芸も復活して，需要も生まれますから，そうすると，浮世絵は世界中に有名ですから，世界中からそういうところに来てみたいと思って人々が集まる。その周辺には次の時代を理想的に，日本の文化をどう発展させていったらいいかを研究する研究センターを周りに作って，そこで世界中の学者が集まったりしてシンポジウムを行ったり，その中心には江

戸の町のかなり広く大きく，これは普通の人たちが来て遊べる場所にもなる。

その中で一番大事なのは，物を作る，場所を作る，建物を作るだけではなくて，そこに日本のホスピタリティー，もてなす心ですね。これはビゲローというボストンの富豪のお医者さんが，エドワード・モースの講演をハーバードで聞いて感動して，日本に来て，日本が大好きになって，それは明治の初期でしょうか，日本を巡って歩いたときに，ある日箱根の旅館に泊まったときに，旅館の女中さんを見て感動して，この女性の立ち居振る舞い，物腰，言葉遣い，こんなに上品で，こんなに優雅で，たおやかで，イギリスの非常な上流階級の貴族の婦人よりもよほど，意地悪でもないし，こんなに品格の高いものが普通にある，モースに対して，「あなたも貝塚なんか掘っていないでこういうものを研究しなさい」と言った，そういうホスピタリティーをその中で，もてなしの心を磨いて，それも妥協せずに，そこで行うということをすると，今のこのトップレベルの文化立国ということが 1 つに行えるのではないか。

いきなり 1 年でとか，2020 年までに本当は完成させていただきたいんですけれども，その前にバーチャルで，CG でこれを忠実に，CG にも莫大なお金をかけていただいて，こういうものを作りますよ，どうでしょうかというものをまず初年度作っていただいて，そこからいろいろ皆さんの知恵，知識，経験を結集して，そういうものを再現していくことがいいんじゃないか。

私は，今というときは，第 2 次国風文化のスタート地点じゃないかと思うんです。894 年に菅原道真が遣唐使を廃止することを提議して，そこから，もう唐の国から学ぶこともないだろうと，もう唐も大分とうが立ってきているからいいんじゃないかということで，遣唐使をやめたことによって，その後の何百年間かで源氏物語が生まれ，宇治の平等院が生まれ，日本の文化が，今世界に誇れるものがつくられた。モレシャンさんなんか「鎖国しろ」と言っていますけれども，鎖国する必要はありませんが，日本が外国から学ぶことよりも，これから日本の文化を外国に発信していく。それで，これからまた新しく日本の文化が花開く第 2 期国風文化の時代が来たなと思いますので，それの 1 つのエポックメーキングというか，そういう意味で，そういう町をつくってしまったらどうかなというのが私の提案です。

都市環境は人の心に非常に重要な影響を及ぼします。最後に，一中節に「都若衆萬歳」という曲があって，それが「昔の京は奈良の京，八重に桜の大和川，中ごろは難波津に，よいこの花と詠まれたる」という歌があるんですね。これは，京を定める，都を定めると

いうことは，非常に美しい花が咲いて，美しい自然環境のもとに都を作らないと，人々の心が荒廃していずれ国は滅びるということを歌っている。それは昔からの，都をつくるときの原理原則だということを伝えているんだと思いますけれども，そういう意味で，ここに入っただけで心が和み，文化を感じ，美しい心になれるような場所をつくって，そこからまず体験していただいて発信していったらどうかなと。私はアーティストですので，現実性のないとんでもない発言かもしれませんけれども，参考にしていただければと思いますし，是非これは国の力で，もしやっていただかなかったら，私はもう独力でもやりたいと思っておりますので，そのときは助成金を出していただいて，三木谷さんによろしくお願いいたします。

【近藤文化庁長官】　　ありがとうございました。唐の長安を目指すとしても，長安そのものをまねるのではなく，江戸のよさをもう一度復活ということ，いろいろいい御提言を頂きました。ほかの方，いかがでございましょうか。エバレットさん。

【エバレット委員】　　エバレット・ブラウンと申します。写真家，ジャーナリストです。都先生の提案,ディズニーランドの中に江戸村を作ることは非常にすばらしい考えですね。この前，TEDx のイベントで，手妻師の藤山晃太郎さんの見立て芸で大変感動しました。手妻のような江戸時代の大道芸は十分知られていない。ただうまいだけではなく，日本独自の感性，見立て文化などが非常に魅力的。このような江戸時代の大道芸をディズニーランドなどで見られると国内外の人々に深い印象に残ると思います。

文化芸術立国の提案なんですけれども，もう既にできているんですよ。ただこの事実を気がついている今の日本人は少ないです。文化芸術立国の様子がいかされていない。世界から見る日本は既に文化芸術立国です。日本文化に関心を持っている人は外国ではとても多い。特に海外のクリエイターたちは日本にたいする関心が高い。今一番必要なのは，文化のファシリテーター，ようするに目利きができる人と語れる人の育成。もっと日本文化の様々な魅力を語り合うムードを作り出せたら，それがきっと火花になります。特にメディアの役割が非常に大きいです。政府とメディアが芸術や文化の魅力的な課題を広げれば，国民はもっと自信を持って活性化を推進できる。

　先月イタリアのブレシアという町で行われた日本の文化祭に呼ばれました。このイベントは日本の国や企業などの支援も全くなく，完全に地元の人たちがやっている企画にもかかわらず，2 日間で 1 万人もの人たちが集まりました。いろんな人に，なぜこんなに日本に興味があるのかとインタビューしたら，大変参考になる意見がありました。まず 1 つは，

日本の伝統文化に触れることによって，地元ヨーロッパの伝統文化をよりよく見えてくるということでした。文化芸術立国日本はまるで鏡のようです。それは世界の舞台における日本の役割だと思います。日本は明治時代にアジアの中のフランスだと言われ，その印象は今でも続いていると思います。中国や韓国が持っていないイメージです。だた，この文化芸術立国のブランディングをうまくいかすために戦略的な政策が必要です。文化芸術の話題を定期的にメディアに発信する事が大事だし，タイミングを計ることも重要です。

あとは，日本文学の影響力の話があります。日本文学の偉大さの認識を高めることがとても重要です。古事記を始め，紫式部など，日本ほど物語が豊かな国はほかにないでしょう。先月，イタリアの本屋でイタリア語の日本の本を展示しているところがあって，九鬼周造の「いきの構造」のイタリア語版があったんですよ。びっくりしました！日本人はどのぐらいこの本を読んでいるのか。難しい本だけど，イタリアの，特に男たちが「粋」について大変関心を持っているんでしょうね。（笑）。Cool Japan もいいけど，粋の Japan もいいでしょう。また，村上春樹の本を読んで，日本に関心を持っている外国人も少なくない。三島由紀夫と夏目漱石も。

もう一つ重要な課題がある。東京から発信する日本文化ではなく，地域の文化の活性化が大事です。地元の人々にもっと関心を持ってもらうために，全国で 100 ぐらいの芸術学校があるんですね。さっきおっしゃったように，鑑賞教育がとても重要です。そして芸術学校の卒業生がもっと地方の人たちと交流したり，若しくは，芸術学校の卒業生のために地方に工房を提供して，そこで地元の人々，特に子供たちとの交流を図りながら作品をつくる事が非常に良いと思います。そうすると，地元の人たちがもっと感性を磨いて，想像豊かに暮らせる。文化芸術は，人々の感性に刺激を与えて，絆を深め，経済も活性化させることができるんです。

最後に明治政府が日本の匠（たくみ）文化芸術を支えた封建制度，また日本文化の基礎となった農耕文化を否定する事によって，日本文化が大分廃れてしまいました。今こそ，日本の心を支えた江戸時代の豊かな世界観（物語）を見直す時代だと思います。江戸時代はただの文化ではなく，人類の代表的な文明の一つでした。文化芸術立国戦略で「江戸文明を人類の偉大な文明の一つとして，宣言すると良いでしょう。また，日本とヨーロッパの歴史を並べると同時発生する出来事が多い。お城が同じ時代に発生するなど。　この共通する視点で，比較文化の研究と企画をやると面白い。

でも地方の文化の再発見という意味で「平成の雇い外国人」JET Program をもっと活用

すれば良い。大学の専攻で，歴史学，文化人類学，美術の歴史，音楽（民族音楽）に能力ある外国の大学の卒業生を雇い，地域の人々と組んで，地元の文化を調べたり，語たったり，英語と日本語で展示会，発表会，ウェブサイト作成の活動を行う。英語の授業で難しかったら，部活でやる。日本の感性教育と結び，地方の魅力的な文化や物語や歴史を異国人の視点を通じて再発見する。そして，全国の魅力的な情報をまとめて，多言語のポータル・ウェブサイトを作成する。文化芸術立国の観光のために重要なことでしょう。

話はたくさんあるんですけれども，とりあえずこれで。

【近藤文化庁長官】　ありがとうございました。是非，第 2 ラウンドに入りたいと思いますので，残りまた 3 名の方，どういう順番でも結構でございます。とりあえずの最初のイントロダクションをお願いいたします。三木谷社長。

【三木谷委員】　私，楽天と共に東京フィルハーモニー交響楽団の理事長もやらせていただいているんですが，そういう中で，今回の話で，西洋文化と日本文化，両方の話が結構入り乱れているというか，混じっているので，なかなか整理が難しいなと思ったんですけれども，文化庁の組織を見ていると，芸術文化課さんというところが両方を担当しているという形になっているんですか。

【近藤文化庁長官】　そうです。それから伝統文化課というのが文化財部にございまして，そこで基本的には，一中節も含めて，伝統芸能をやっております。

【三木谷委員】　それぞれ目標設定をどこに置くかということで，日本の伝統文化をより深めて世界に広報していくという話と，それから西洋文化，オーケストラを中心として，これをより高めていく，世界標準に合わせていく，世界のトップ 20 のシンフォニーの中に小澤征爾さんがやっているものが 1 つ入っているんですけれども，それ以外入っていないということを考えてみると，ソウルのシンフォニーもかなりレベルが上がってきて，むしろ韓国の方が先に行っている感じになってきているので，そういうところで，チームを分けて具体的な戦略を立てていくことは結構重要なのではないかと，この組織図を見ていて思ったということが 1 つです。

それから 2 つ目は，プロの育成と，それに合った雇用体系という話があると思うんですけれども，今御存じのようにシンフォニーなり，オペラなり，これは一般の従業員という位置づけになっているんですね。基本的には終身雇用になっていまして，1 回入ると基本的にはずっと続いていくということで，大体芸大なり，東フィルとか，N 響とか，読交とか，全部合わせて新人の採用が年間で 4 人から 5 人なんです。それ以外の人は，ピアノ教

室なり音楽教室に就職しなければいけないということで，韓国は抜本的に変えまして，もうちょっと新陳代謝のいいような形にしたんですね。

東フィルはどうやっているかというと，自分たちの中で委員会をつくって，それでパフォーマンスが悪くなった人は基本的に辞めてもらうという制度をつくっていまして，それでレベルを保っています。

3 番目は助成金の話なんですけれども，東フィルは運営助成金をほとんどもらっていないということがありまして，かなり技術的にも高いですし，評価も高いということでやっているので，助成金を与えることによってモラルが上がるかというと，必ずしもそうでもないなということがあるので，ここはめりはりをつけてやるべきではないかと思っています。

来年，2014 年 3 月にグローバルツアーをやるんですけれども，これは楽天も含めていろんな企業がスポンサーをするんですが，こういう海外でのイベントは積極的に推進していくべきではないかと思っております。

2 つ目は，すみません，個別具体的な話で申し訳ないんですけれども，文化庁のホームページがいけてないということで，フランスのフランスカルチャーというページがあるんですけれども，それと比べると，この中にもインターネットのホームページの，外国人観光客向けの充実というのがあるんですが，やはりもう少しインターネットとかスマートフォンをつうじたカルチャーの発信を，かっこいい形でどんどんやっていくべきだと思います。これは，コストは多少は掛かると思うんですけれども，そんなには掛からないと思うので，是非，象徴でありますから，文化庁のホームページを中心に，ここから日本の文化を発信していくことをやっていただきたいなと思っています。

また，文化財ということで言うと，今一番重要なのはスマートフォンになってきているので，各文化財のところには，基本的にはフリーWiFi があって，アプリケーションがあって，そこに行けば，昔みたいな端末というんですか，音声ガイドはもう古くなってきているので，本当にスマホがあって，アプリがあって，行けば深く情報がとれるということがあると思いますので，IT 戦略は結構重要かなと思います。

昔の形だとお金が掛かってしまうんですけれども，WiFi を入れてアプリケーションがダウンロードできるようにするだけであれば，もっと深く情報伝達もできますし，それからまたコストも，恐らく 10 分の 1 とか 20 分の 1 でできるということがあると思うので，それはやるべきかなと思っています。

最後にですが，国際的なイベントが，フランスで言えばカンヌ映画祭なり，そういうものがあると思うんですけれども，世界の人が日本に集まってくるようなイベントがあると良い。我々の業界で言うと，御存じのようにスティーブ・ジョブズは日本の禅カルチャーにかなり影響されていますし，ビル・ゲイツも今軽井沢に別荘を作っていますし，ラリー・エリソンは自宅が日本邸宅。アンドロイドを作ったアンディ・ルービンは奥さんが日本人ですし，ヤフーのジェリー・ヤンも奥さんが日本人ということなので，かなり世界のビジネスマン，あるいは政治家の方，また文化人も含めて，日本の文化のファンの人は多いと思うんですが，その人たちが日本に来て，そういうものに対して触れるようなイベントがないというのがあると思うので，これをうまい形で設計したらいいんじゃないかと思います。

【近藤文化庁長官】　ありがとうございました。それではどうぞ，次は。

【エバレット委員】　ちょっとつけ加えたいところがあるんですが，文化芸術立国宣言のためにネットで活用できる文化的なコンテンツは豊富にあります。全国の美術館の作品を全国のポータルサイトに紹介すれば良い。聞いた話でフランスがそうやっています。美術館が持つ作品をネットで見ると知名度があがります。また，そのコンテンツを商品化できる可能性がある。特に絵巻物など。細川家名宝のアプリ参考。また Agence des Musees Francais のウェブサイト参考。

日本の絵巻文化が文化芸術立国のブランド戦略に非常に可能性があります。絵巻は日本文化の美しい面を代表しています。しかも中世から現代まで。いっぽう巻物という形式は，古来から世界中で使われていましたから，文化歴史上の共感性や普遍性に関して相互理解を深めるアートだと思います。これが日本ほど豊富な国はほかにないです。日本の絵巻は漫画やアニメの原点と言われている。絵巻は印刷技術以前のメディアだと思われているが，実は今後の iPad やスマートフォンなどにとても相性がよい。スクローリングという機能を持っているから。だから絵巻の発想で，新しいコンテンツ商品がいろいろできると思います。これは IT の面で非常に可能性が大きいと思います。　全国の美術館から集まるデジタル絵巻物文庫をネットで一般的にアクセスできるように，また，企業の絵巻商品開発。併せて，絵巻立国ブランド戦略もできる。過去，現在と未来をつなぐ日本の絵巻文化。

【三木谷委員】　この前，新経済連盟で新経済サミットをやったんですが，そこで世界中の IT のアントレプレナーを集めていろいろ話をしてもらいました。僕は結構驚いたんで

すけれども，彼らのコメントとしては，日本のデザイン性の高さというものが大変，何というか，浸透しているというものでした。また彼らが言っていたのが，日本人は何でいつも自信がなく否定的なのかと。こんなにデザイン性も高く，文化度も高いのにいつもマイナス面ばかり見ているということも言っていたのが印象的でした。これは感想です。すみません。

【近藤文化庁長官】　　ありがとうございました。藤島先生か王先生。

【藤島委員】　　どうぞ王先生。

【近藤文化庁長官】　　じゃあ王先生，お願いします。

【王委員】　　それでは。私は大学院で教えておりますが，毎年三十数名の応募者が来ておりますが，中国の留学生が多くて，日本の文化を研究したいというのが目的でした。ここ数年，私に教えてほしいと言われたのは，ファッションも含まれていました。日常生活の中でどのようにクールに，格好よく，かわいく，そして上品に洋服などをアレンジすればいいのかと。こうして日本が注目されていることでした。

ここでは，恐らく中国又はほかの国の人々にとって，クールという中身及び定義に関しては非常に幅広いものだと思います。クールというのは，伝統，そして古き良きものも含まれているものと考えられ，現代的なものに重点を置くという発想，あるいは理解が，以上のものも含まれているだと思います。

このような理解を踏まえた上で，連休の間に中国から文化人たちが，休みを利用して日本を観光しに来ました。私が求められて案内をいたしました。皆さんが第1に挙げた行きたいところが，日本の伝統文化及び歴史を，まとめて1か所を見て分かりやすく体感できるところでした。

このようなことから見てまいりますと，恐らく文化形態としての日本が今後もますます注目されていくだろうと考えております。と申しますのは，震災後の日本の変化，それは経済・政治その他の変化が大きいですけれども，文化形態として，特に災難に見舞われていてもなお秩序あり，そして礼儀正しく，公共意識を持つ市民の在り方が世界を驚かせたことが，恐らく記憶に残っていると思います。

そのようなことも含めて文化形態としての日本への注目が，震災1年後の中国で文壇を代表する雑誌，「中国作家」というのがありまして，そこでは震災1年記念とする特集が取り上げられて，中国の中で読まれていました。また北京にあります天文館では，宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」が常設の活動の一環として上映され，「雨ニモマケズ」が読まれて

いるというような現象でした。

文化形態としての日本への注目に関して，私自身が 2006 年から，日本の各地にあります治水の神に関する信仰の形態に関して調べ始めてまいりました。これは過去のものではなく，災害，そして地震の多い日本にとって，昔から今に至って，その困難を乗り越えていくため，精神的なものを求めているという背景があるものです。

その調査の対象は，漢字では非常に難しくて，ここでちょっと，線が細くて見えづらいかもしれませんけれども，禹王（うおう）信仰に関する調査でした。2006 年から日本の各地域の皆さんの積極的な御参加のもとで，今現在日本で 70 か所あることが分かりました。僅か数年でしたけれども，その中で特に，かの空海も，この禹王という治水の神を顕彰する記念碑に文章を書かれていたものが見つかったぐらいでした。

こうして，本日配っていただいた資料の 8 ページにあります「地域を元気にする」というところから見てまいりますと，先ほど申し上げました治水の神を 1 つのキーワードとするネットワーク，古来，そして今現在に至って日本に存在しており，しかも現在も地域の祭りとして，現代人の生活の一環として生きておられることが日本文化形態の一特徴として，そしてクールジャパンの定義に関して伝統を生かして生きているもの，そして未来のためにも提言して，恵みをもたらしてくれるものとしての地域の活性化などがたくさんのことを考えさせてくれます。

この地域の信仰の対象となっているものが，日本だけではなくて，中国，韓国及びアジア諸国に同じようにあります。そうすると，地域を中心とするネットワークが国境を越えて世界的に広がっていく，日本文化の再生の波及力というのは，その現場だけではなく，世界に貢献していく，それに対して修学旅行，及び歴史教科書，国語教科書，それから高年齢の階層のライフスタイルの改善など，たくさんのことが考えられていくと思います。こちらは 1 つ私が提案してまいりたい，地域を元気にすることによって周辺の地域を，国を，世界を元気にしていく日本の文化力としての提案でございます。

もう一つの事例は奈良ですが，奈良遷都 1，300 年記念の行事を通して，正倉院を中心とした奈良の文化財に存在している力を再認識させてくれました。これも先ほど申し上げました日本という 1 地域から世界に貢献できる，そしてその拠点になれるようなところとして更に拡大し，更にそれを活用すべきものだと考えております。

3 つ目は，平和モデルの拠点として石垣島を提案したいと思います。石垣島は敏感なところになっておりますが，そんなところだからこそ平和発信のモデルとして，それに関連

するイベント，また施設，あるいは新しい企画の実施の場として非常に良好ではないかと考えております。

是非文化庁の支援局としても，この治水の神を中心としたネットワークの 70 の地域，沖縄から北海道まで，その支援をお願いしたいと思います。以上です。

【近藤文化庁長官】　ありがとうございました。地域の活性化というところから周辺国，世界に発信するということです。

最後になりましたが，先生，よろしくお願いいたします。

【藤島委員】　最後のようですのでちょっと肩の力を抜いてと頂きたいと思いまして一言，実は今朝，庭にアザミの花が咲いておりましたのでそれを入り口でお渡ししましたら，いつの間にかそこに，あんなに生けていただきまして，日本画で申します花鳥風月がこの部屋にも少しだけ現れたということをうれしく思っております。どなたか，飾っていただいて大変ありがとうございます。

私は常日ごろ，日本の国は経済大国とともに文化立国といいますか，この 2 本の柱が大切であるということを思っておりました。ですけれども，今皆様方のお話を，聞かせていただいて，私も思いますに今，日本画と洋画の違いがどこにあるのかということを明確に言えるような日本人はとても少なくて，現代は，形は日本人であるけれども心は何人か分からないような日本人が多くなり過ぎて，そういうことを言うとすぐ右傾化と言われてしまう傾向が今までありましたが，これからの時代は真の日本文化を身に付けた人々が真の国際人であることを発信してゆかなければならないと思うんです。

文化芸術というのは，その国にとって一番大切なものでありまして，いわば私は「国家の教育論」であると思うんですね。人間を教育するのは知育，徳育，体育ですけれども，それに加えて私は，美学を教育するということがとても大切であり、ことに国家教育論にあっては，美育といいますか，文化力の中でもより具体的な美を教える機関が是非ともこれから必要ではなかろうかと思っているわけでございます。

先ほど大臣の冒頭の御挨拶にありました列島文化 2，000 年という歴史の中で，私たちの日本画も，仏教とともに伝来してきまして，1，500 年という花鳥風月を中心とした美意識がございます。古神道は 2，600 年以上，そして仏教，儒教，道教，その全ての美意識を凝縮した形で大和絵日本画という形に現れておりますが，これを世界に発信するにはどうすれば良いかを考えます。そこで私は，日本の美意識は人類の宝である，地球の東の果てであり、また東の始まるところに人類が生み落とした宝でありますから世界中の人々が，共

に楽しみましょうということで，キリスト教圏にも，イスラム教圏にもこれから広まっていくと信じています。

それにはやはり政治力と経済力と文化力，この三位一体論と申しましょうか，今まで日本は，ひとつひとつはとてもすばらしい成果を残しておりましたけれども，大きく１つの力としてはなかなか成果を見ていない，例えば私たちは日展というところにおりますけれども，日展も日本画部門を始め５科ありますけれども，そのほかに日本画は院展とか創画展とかありますが，みんなそれぞれセクト主義になってしまって，各個人とか各部分ではとてもよく勉強して，私は世界でもトップクラスをいく，誰にも負けないほどの技術と知性を持っている大芸術だと思っておりますけれども，どうもグループ主義になってしまって，かつてのように力を発揮しきれていない。いわんや世界発信ということが相当おくれているのではないかと思うわけでございます。これは現場からの声でございます。

そこで，特に経済と芸術を中心に，政治，経済，文化，この三位一体論が大切と考えるのです。今日は三木谷先生にもお越しいただいておりますので，またいろいろ御指導願いたいんですけれども，これらを一緒に考えなければ大変かなと思います。経済が幾ら発展しても無駄が多くなり俗望文化が広まりそして結果が人々の上に実らない世代になってしまうおそれがあると思いますし，政治が熟し過ぎても権利や権力ばかりが横行したり，指数は比例をし，ついには争って戦争へと発展しますので，そこで文化力が大変必要になってくると思うのです。日本文化の世界輸出は人々の精神のサプリメントとして相当貢献できるのではないかと思うわけでございます。

したがって，私はこれから，この懇話会，本当に今日は初めて，今も緊張しておりますけれども，更に分科会として小さくして開かれ，もっと深化させて，できれば多くの日本画の作家，また日本画を支えてくださる絵の具家さんとか額屋さんとか，画商さんとか美術評論家の方々にも参加して論じ合っていただきたいと思います。額だって西洋の額とは違って，日本は神社に掲げた扁額（へんがく）が本になって日本画の額縁が発展してきて，世界にないシンプルで格調の高い額縁というものをつくり上げております。画家だけではなくて，その周辺を支えている人々，日本の国の物づくりを今まで支えてきたこの技術，これは日本画という世界に集約されてもおりますので，こういったものにも分科会を，どうぞ国が，文化庁が手を差し伸べていただいて，そういう分野の人たちを激励し，意識変革を図っていただければそれぞれが一体となって勢いづいて，先ほどの三位一体論とともに，即，私は日本の文化力というものが世界の至宝としていかされるのではないかと思い

ます。

どうも日本人は自信がなさそうだという，先ほどもおっしゃっていましたけれども，まさしく，いまだに精神の植民地化というんでしょうか，横山大観が 100 年前，パリ万博のときに，パリを羽織はかまでかっ歩したあの勢いは本当に今見られないわけでございますけれども，このところ，何か新しい気分が我々も感じ始めております。この期を逃さずに，文化立国として，発信をしてゆかなければならないと思います。また私は中国の大学でしばしば講演をさせていただいておりますが，先ほどの文化庁長官のお話で，長安の都，空海も行きました。私も空海の青龍寺を訪ねましたが，あの頃は本当に世界中の識者が長安に集まりました。その長安時代の唐・宋（そう）や隋（ずい）の文化は日本の国に色濃く，今の五節句にしても残っております。皇室の行事や，寺院や神社等の処作・儀式，またそれらのお衣装を見ていてもほとんどあの時代のものは残っているわけでございまして，中国の学生さんに，あなた方は卒業なさったら，日本の国に来て古代の自分の国の文化と出会ってくださいそうすれば真の愛国心が沸いてきますでしょうし，どうぞ自分探しの旅にお越しくださいと申し上げますと，中国の学生さんは本当に文化が大好きで，日本の学生さんの数倍も感動を示して，中には涙を流して駆け寄ってくる女子学生がいるという状況でございます。先ほど中国の王先生からそういう学生さんのお話がありましたが，そのとおりでございまして，日本の文化に対しては，本当に 2 時間前にお会いしただけでも相当に関心を示してくださって，その感想文には，「我々は余りにも今まで日本の国を知らなかった，ましてや日本画があるなんていうことは全く聞いていなかった」という感想文が随分寄せられるわけでございます。

日本画はそれだけでなく，私は小学校へ出向く文化庁のゲストティーチャーもさせていただいておりますけれども，小学生も本当に喜んで，日本画の教室が終わったら，成績が全体的にアップしたとか，多動性の子が最後まで二時間も書き続けたとか先生方が驚きます。色紙を描かせてもまずものを大切に扱う精神を伝え「色紙をこのようにしてささげ持つんですよ。こうして片手の指先だけで持ったらいけません」と物を大切にする心，そしてよく見つめる観察力，また，ねばり強く描く持続力や集中力それらをとおして見える美と見えない美の見つめ方とか，いわゆる人間力の修養を，そういうところから日本画は教えるのです。そしてまずは，西洋画が重視する想像力とか発想力とか自由表現力等の根本でありますところの写生・写意から始めます。心を澄ませて物を大事にする，こういうもののとらえ方は「はらえたまえ，清めたまえ，そして（幸）さきはえたまえ」という古神

道の教えによるものから来ておりますから，本当に日本画力は清潔感，清明感そして正浄感という精神性を大切にする芸術でございます。これからの学校の伝統教育でも御参考にしていただければと思います。このあたりにしておきますので，どうぞよろしくお願いいたします。

【近藤文化庁長官】　　ありがとうございました。それぞれの先生方の日本文化への強い思いがあふれて，ちょっと時間がオーバーしてしまいましたが，これからほかの先生方の御意見への反応でも結構ですし，これを言い忘れたという点でも結構でございますが，後半に入る前に，もし大臣何か，御質問がございましたらどうぞ。

【下村文部科学大臣】　　もう後半といっても，11 時半を過ぎまして，本当に皆さんから興味深いお話をお聞かせ願いまして，本当にありがとうございます。第 2 次国風文化ということをお聞きして，驚きましたが，おっしゃるようなことをこれから迎えなければいけない。また日本はそれだけの世界に誇るべき文化芸術があるにもかかわらず，何人かの方々がおっしゃっていましたが，余りにも今日本人は自信を喪失して，否定的になっているところがあって，これをしっかりともう一度自信を持つと言いますか，変な自尊意識ではありませんけれども，正しいものは正しく認識するだけの力を持つことが必要であると思います。

今後の我が国の，ある意味では国家戦略ということを考えると，こういう文化芸術の部分を世界に発信することによって，これは日本の古来の伝統文化のすばらしい部分と，それから三木谷さんもおっしゃっていましたが，同時に世界に通用するといいますか，ある意味では世界そのものの文化芸術を，この日本という場所を使って，交流の場として世界中の芸術家が，文化人，そしてそれを見たいと思っている方々に来ていただくような，まさに長安という話が出ているわけでありますけれども，そういう場としてどう提供するかということが問われているのではないかと思いますし，本当の意味での，ハンチントンの世界 7 つの文明の中で日本だけが 1 国で，またある意味では，単一民族ではないけれども 1 つの民族的な部分として，1 つの島国の中で独自の文明という中の，本当のこれから価値と評価，それから世界に対してしっかりと発信をしながら，それが古来持っている日本の共生思想と合わせて，新たな，21 世紀型の，人類に提供できるような日本本来の世界の，これは人と人との共生だけではなくて，人と自然との共生でもあると思いますが，これと文化芸術を合わせることによって，本当の意味での国家戦略，これはもちろんそれ自体が同時に経済的な発展にもつながる。またある意味では今までの思想・哲学を更に次元上昇

させるような，そういう，日本というのは潜在的な可能性，それは文化芸術の部分を引き出すことによって発信できる。またそういうことをすることによって日本人自身が気づくと言いますか，あるいは発見するということもあると思いますし，実は非常に崇高な，レベルの高い戦略をこれからどう打ち立てることができるかが，我が国にとってと言いますか，人類にとって大変重要なことであると思いますし，今日は潜在的にそういうところまでの議論になっていくようなお話も，いろんな方々から提示していただいたのではないかと思います。

そのためにまずは実際に具体的に，文化芸術で日本が咲き誇る国だと，一度そういう国に行ってみたい，そういうものをどう創っていくかということが問われているのではないかと思いますし，そういう視点から更に，先ほどまだ発言，言い足りなかった方も何人もいらっしゃるようですし，お話をしていただければ有り難いと思います。

【近藤文化庁長官】　ありがとうございました。大臣は公務のために 50 分に御退室になりますので，それまでに，是非大臣に一言ということがあればそれを優先的に，会議としては一応 12 時までを予定しておりますので，次回の会合でどういうことを議論するか，どういうふうに絞っていくのか，今大臣の言われた国家戦略というものに具体的に何を国に期待し，何は官と民とで協力していくか等々，今後の進むべき具体的な方向とか手段についての御提言もあれば，次回も多分そういうことになると思いますが，今回残りの時間でそういったことについても提言をいただければと思います。いかがでございましょうか。私が気がついた順で言うと，三木谷さん，呉善花さん，藤島先生，王先生という順番でお願いいたします。

【三木谷委員】　意見ではなくて，逆に言うと，私はいつもよく分からないのは，韓国のコリアンポップ，K-POP もそうですけれども，いわゆる大衆芸能とか大衆文化と伝統文化をどのようにすみ分けするのかしないのか。東フィルでも結構新しいものの取組って，フュージョンみたいな形でやっていたりしていくんですけれども，どうしても日本の伝統文化ということになると，結構厳格な感じがあって，すごくハイレベルな海外の人にはいいと思うんですけれども，一般的な人というところにまで到達できないというか，コミュニケーションできないというか，そういうところがあって，今回の話も，クールジャパンと一線を引いて，いわゆる大衆文化というところに入っていないと思うんですけれども，でもある程度ミックスしていかないと，広く入っていくことは結構難しいのではないかと思っていて，それも今後考えていった方が良い。今何となく戦略として，伝統と大衆と分

かれてしまっている気がして，そこをまずフュージョンしていく。多分，今一番文化発信力があるのは日本食だと思うんですけれども，多分それは官庁のいろいろな問題があって線引きがあるんだと思うんですけれども，茶道にしても何でも関係してくると思うので，そこを伝統文化だけ切り出してやるのもいいんですけれども，もう少し新しいものとか，食とかも交えていかないといけないんじゃないかと思います。

【下村文部科学大臣】　今の点についてはおっしゃるとおりで，日本食はちょっと芸術文化とは離れますし，クールジャパンの方にお任せして，今日は秋元さんにも来ていただく予定だったんですが，御都合がつかなかったんですが，まさに現代の大衆音楽そのもので，AKB48 を作られた方でもありますから，そういう分野も含めて，古来の伝統文化だけではなくて，今日本の，正にそういう世界に発信していく音楽とかいう部分も，逆に海外の若い人たちが日本に来て，あるいはもちろん，そういう若い人たちが逆に海外に行って発信することも必要ですけれども，そういうことも含めて，問わず御議論いただきたいと思います。

【三木谷委員】　あともう一つだけ，国際会議に行くと，例えばインドネシアであったり，中国だったりだと，ファーストレディーが民族衣装で出てきたりというのがあるんですけれども，日本の政治の方は余り，私もやっていないので言えないんですけれども，余り和服で出てくることはないですね。あれは何か，決まりとかないんですか。

【下村文部科学大臣】　それは，和服で行きたいんですけれども，なかなか着付けが結構大変ですね。

【三木谷委員】　それは予算をとって，やるというのはどうでしょうか。結構いいものですからね。

【下村文部科学大臣】　そうですね。

【三木谷委員】　やっぱり華やかな会議でね。

【下村文部科学大臣】　是非，そういうふうにしたいなと思います。

【都委員】　初めは着付けていただいていいと思うんですね。着付けの専門家に着付けていただけばいいです。

【下村文部科学大臣】　そうですね。

【三木谷委員】　大した値段ではないので。

【下村文部科学大臣】　そうですね。

【山脇委員】　頻繁に着るうちに着られるようになります。

【近藤文化庁長官】　　それでは藤島先生，お願いいたします。

【藤島委員】　　私，これ，本当に素人考えで大臣にお伺いしたいんですけれども，近頃考えているのですが，日本の文化を発信するのに，もっと具体的に，今までも，前長官のときの文章も頂いて拝見致しましたけれど，なかなか進んで，目に見えて我々に見えてこないので，その一つとして，本当に素人考えで極論的かもしれませんが，例えば先ほどの中国との話もありましたように「日中の文化同盟」みたいなもの，あるいは中国だけではなくインドとか，韓国もそうでしょうし，またヨーロッパでも，そういうところの国々と日本は「文化同盟」というものまで発展させて，政治的な力も一緒にしながら文化発信をしていくことはできないものでしょうか。ちょっとお尋ね，素人考えですみません。

【下村文部科学大臣】　　それはもう，今なかなか，中国や韓国と政治的には非常にシビアな関係もありますから，文化とか芸術とか，別次元の部分で積極的に韓国，中国等と交流するようなことをしていくことは，戦略的に大変重要なことだと思います。

【藤島委員】　　よろしくお願いいたします。

【近藤文化庁長官】　　では王先生。

【王委員】　　さっきのお話を受けて，発言させていただきたいと思いますが，大衆文化と伝統文化とどううまくミックスしていって，そして地域文化と国際文化とどのようにミックスさせていって，大衆参加と行政の支援及び国際的協力をどうするかということに関しては，私が申し上げました治水の神を対象とする活動に関しては，日本では実は 2010 年，大衆が主体としてそれぞれの地域の行政の支援を受けた，日本全国治水の神サミット，2 回開催されました。

第 1 回は神奈川県開成町という町でした。第 2 回は群馬県片品村という観光地でした。そして今年第 3 回，また更に毎年のように，治水の神を祭りとして地域の生活の一環として活動しておられる地域を中心に開催する企画を立てておりました。このような動きを中国と連動して，今年の 10 月，中国の河南省と共同で開催する，また今後も開催し続けていくという試みをしてまいりました。つまり，日本の文化が，日本という地域の中だけで共鳴・共感・共有することは大事なんですけれども，それが同時に，広い地域の人々と共鳴・共感・共有できれば更に効果が大きいと思いますし，そして相互学習だった古代の日本と東アジアの関係，また近代の日本と西洋の関係というプロセスから相互学習，相互発展，相互互恵の新時代に突入していくべきだと考えております。

そのためのモデルケースを，理念として，また構想として，企画としてあってはすばら

しいことなんですが，それをもとにして，実例として，しかも可能性のある実例として幾つか実践してみて，たたき台に，参照枠として作ってみたらいかがでしょうかと考えております。そのための御支援を大臣に是非お願いしたいと思います。

【近藤文化庁長官】　　ありがとうございました。呉善花先生，失礼しました。先に言っていただいて。

【呉委員】　　最近，世界的に日本風というものがとてもブームになっておりますね。例えば茶道だったり花道だったり，着物だったり，特に日本の「道」がつく文化は，ヨーロッパや韓国や中国をはじめとするアジア諸国では，これまでにない大きな興味の対象となっています。ところが，日本人自身はそれほどでもなく，そこからかなり離れてしまっているように感じられます

学生たちに「和室の中の床の間ってどんなもの」と聞きますと，ほとんどの学生が床の間を知らないんです。「ふすまとは何？」と聞いてもよく分からない，見たこともないという学生もいます。それじゃあ，抹茶を飲んだことがある学生は手を挙げてみてというと，数百人の中で１人ぐらいなんですね。それだけではありません。とても大事なことですが，「日本の天皇ってどんな存在なの」と聞きますと，まともな考えを述べた学生は一人もいませんでした。日本の高校までの授業では，いったい何を教えているのでしょうか。

日々日本人学生たちに接している限りでいうのですが，日本人自身が日本の精神に，伝統文化に誇りを持てていない，自信を持てていない，それどころかほとんど知らないというのが実際です。これでは，いったいどうやって日本を世界に発信できるかということなんですね。一部の高級な知識人たちだけが分かっていて，日本を世界に発信しましょうということではいけません。「日本」が教育されていないので，若い世代に「日本」が伝わっていないんです。少なくとも，日本人の教養の基礎として，日本の伝統文化をしっかり教育していくことが，何よりも重要なことではないかと強く感じております。

【下村文部科学大臣】　　私，すみません。

【近藤文化庁長官】　　それではここで大臣が御退出となります。

【下村文部科学大臣】　　申し訳ございません。また後で報告を受けさせていただきたいと思いますが，またよろしくお願いいたします。ありがとうございます。

【近藤文化庁長官】　　副大臣と政務官はこのまま残られますので，これからの御発言は私からも大臣に必ず，後ほどブリーフをいたしますので，それでは山脇さん，どうぞ。

【山脇委員】　　私，三木谷さんの御質問を聞いてはっと思ったんですけれども，能はと

もかく，歌舞伎とか，ほかのものは基本的に日本の大衆文化，伝統文化なんですね。それが敷居が高くなってしまったということに問題があるんだと思うんです。着物しかりで，着物を着ることが特別なときになってしまったということが，もちろん洋服の方が便利ですので，毎日着る人は少ないかもしれませんが，それはやはりどうしてかというと，さっきも申しましたように，子供のころから全く触れていないから，伝統文化が特別なものになってしまっているということですので，そこら辺から三味線の音が聞こえてくる，ここら辺から小唄のお稽古の声が聞こえてくるということがなくなってはしまったんですけれども，やはり学校教育なり何なりで，いつも触れていれば，これがまた元の大衆文化に戻っていくんだろうと思っております。

それに関連してなんですが，今喫緊の課題は，大衆文化のキャッチャーというか，観客が少なくなっていること，それに伴って担い手も少なくなっていて，本当に絶滅危惧種になっているということです。歌舞伎などは世襲制なのでもっておりますけれども，文楽にしても，長唄とか清元も世襲制じゃないですよね。

【都委員】　ないです。

【山脇委員】　義太夫もそうですしね。一中節も違うんじゃないですか。

【都委員】　違います。

【山脇委員】　ということで，世襲制のデメリットもあるんですけれども，メリットもある。世襲制でないものというのは，観客の中から弟子として育っていくもので，それが今結局なくなってしまって，あっという間に，あと二，三十年したら文楽の太夫もいなくなってしまうんだろうし，あれが世界文化遺産になっていても，多分もうなくなってしまうという時期に今来ている。

そうしますと，歌舞伎は世襲制でもありますし，それから松竹というところが商業ベースに乗せているということでもっていますけれども，そうじゃないところはやはりスポンサーが要るんですね。それが今は国であるべき。それが観客が育つことによって，またスポンサーなしでやっていける時代が来ると思いますけれども，今はやはり，誰かが手を差し伸べなければならない時期だと，これは本当に喫緊の課題だと思っております。

【近藤文化庁長官】　ありがとうございました。一中さん，それからエバレットさんの順で。一中さん，まず。

【都委員】　いろいろ皆さんのお話を聞いていて，エバレットさんとか，王さんとか，外国の方から伺うと，日本の芸術文化立国はもうできていると。ただ，それを語っていな

いだけだと。それと，今の山脇さんのお話でも，非常に日常生活と日本の伝統文化が隔絶している，床の間を知らないということもそうなんですけれども，でも実は，伝統文化というのは非常に日本人の日常生活，誰にでも，一般大衆にでも非常に浸透しているということを外国の方は感じていらっしゃるんだと思うんですね。

その一例として，私は音楽の方から申し上げると，今日は秋元さんが見えていませんけれども，たまたまラジオで AKB48 の歌を聞きましたときに，これは日本の伝統音楽だと思ったんです。それはなぜかというと，ちょっとばらばらな合唱というか，一般的には下手くそだと，そこが魅力なんだということなんですけれども，あれが日本の伝統的な合唱なんです。

思い起こしていただければ，まず声明，お寺のお経，能の地謡，文楽の連れ，歌舞伎の長唄の，大勢で歌う連れ歌，そのときに，グレゴリオ聖歌とか，バチカンでの聖歌とか，ウィーン少年合唱団とか，そういうふうにぴたっとそろった合唱ではないんです。

AKB も，もしウィーン少年合唱団とか，あるいは日本の少女合唱団，要するに NHK 合唱コンクールに出るような合唱のレベルだったら，あんなに人気は出ないと思う。半ばみんな引いちゃうと思うんです。だけどあのばらばら感が，一般的には下手くそと映るんですけれども，そこが魅力だということになっているんでしょうけれども，それが実は日本の伝統的な合唱で，だからみんながいいなと思うんじゃないかと，私は一瞬 AKB を聞いてそう思いました。余り知識がないので，一瞬聞いただけの印象なんですけれども。

それが 1 つの例ですけれども，そういう日常的な中に，床の間がなくても床の間的なものが家の中にあったり，壁に何かかけていたり，花を生けていたりすることもあったり。だから，生きているんだということをもっと語る，今エバレットさんがおっしゃった日本の文化がここにあるよということ，これが日本の伝統なんだよという自覚を持ってもらう。とにかく伝統的な，いきなり能とか一中節を聞けと言ってもなかなか難しいかもしれませんけれども，身近な中に既に日本文化が，伝統的なものがこんなに生きているというつながりの中で伝統文化を理解していただければ，今のように，実は大衆文化なんだということも，先ほどお話ししたように全ての江戸の人が習ったということは正に大衆文化ですけれども，そういうことなんだということが自覚できるのではないかと思いました。

【近藤文化庁長官】　　じゃあエバレットさん，どうぞ。

【エバレット委員】　　そうなんです。日本ではすばらしい文化的な引き出しがたくさんあります。だからこれからまずその引き出しを開けて，何があるのかを見極めて，また周

りの人たちとそのコンテンツについて話し合う，話題にすることからですね。

あとは，国のブランディングとして，文化芸術立国のことは，やはり着物が大事ですね。僕は 10 年間迎賓館に出入りしたんですけれども，晩餐会のときに着物を着る人はほとんどいないんですよ。少なくとも女性は洋服より着物が魅力的です。そこから始めればいいんじゃないですか。

【藤島委員】　それではもう一言発言をお願いします。

【近藤文化庁長官】　藤島先生，最後に。

【藤島委員】　今日，宮田先生がお越しだと思っておりましたのでちょっと控えておりましたけれども，いらっしゃらないようなので，造形芸術，ことに用の美の工芸について少し申し上げさせて頂きます。この分野は，日本画・木彫とともに日本の宝でありまして，日展だけでも 22 のアイテムがございまして，水引だの手まりだのと入れますと百以上もあると思われます。これだけ多くの工芸がある国は世界中にはないのではないでしょうか。これらは，ものづくり日本国の原動力でもあります。したがって日本の国宝もそういったものが網羅されていて，私は工芸の世界をどう新しい時代に見合った理論武装をしていくことができるか，それが大きな発展につながるのではないかとも思いますので，また長官からもどうぞよろしくお願いいたします。

【近藤文化庁長官】　ありがとうございました。大臣，政務官，何か。

【福井副大臣】　一言，個人的に私，土木屋なものですから，禹王のお話をしていただいて本当にありがとうございます。今の土俵入りの横綱の所作ですね。すり足と大地をたたいて，大地の怒りを静めるという，あれは 4，000 年続いているんですね。4，000 年前の所作が今でも日本の伝統の根幹に存在している，そんな仕事をしてみたいなということで，近藤長官の業務命令のもとに頑張っているわけでございまして，町造りでも，カルチャーではなくてカルトの世界なんですが，風水論で町造りをしようということで，1 人建設省で闘ってきた人間で，そんなやつもいるということだけちょっとお見知りおきいただければと思います。

【近藤文化庁長官】　ありがとうございました。政務官はよろしゅうございますか。どうぞ。

【丹羽大臣政務官】　私，今でも美術館に行くと記憶に残っているのは，今から 35 年前，日本でツタンカーメン展を初めてやったときに，まだ幼稚園だったんですけれども，母親に手をつないでもらって連れられていったという思い出がありまして，それから美術館に

行くということが非常に，ツタンカーメンのよさは分からなかったんですけれども，多分母親と一緒に行った楽しさが残っているんですよね。そうやって親子で体験する，親が子供を引き出していくことが非常に大事だと思っております。そういったことが自然にできるような環境をもっと政治の場でも作っていきたいなと考えております。以上です。

【近藤文化庁長官】　ありがとうございました。まだまだ御意見はあろうかと思いますけれども，ちょうど時間となりましたので，第1回の会合はこれでお開きとさせていただきたいと思います。

大変広い分野のテーマで，最終的にどこまでどう絞るのか大変難しゅうございますけれども，今日伺った範囲では，日本に確実に残っているすばらしい日本文化，これをどうやって，より，我々自身がそして子供たちが認識し，そこから自信と誇りを得るか，そして同時にそれを海外に発信し，その魅力を地域発，あるいは東京発で周辺世界に伝えていく，そのためにいろいろな政策，手法があろうかと思います。基本的にはすそのを広げる，特に，子供たちにとってやや遠のいてしまったような伝統文化，伝統芸能，あるいは伝統工芸について，ファシリテーションのような形，鑑賞の機会を増やす，ファシリテーターを養成する，そういうことでその基盤を，そのジャンルにかかわらず日本の国民一般がそれをよく理解をする，力を得ることが極めて大事であるということが一つのコンセンサスだったように思います。そこに至るにはどういう手法が一番効率的なのか，政府の役割は何か，アーティストの役割は何か，あるいはファシリテーター等の役割は何か，マネージャーの役割はどうか，そういったことを更に詰めていって，具体的な政策に落としていければと思います。それ以外にもいろいろな，IT の活用とか，芸術の質をどのように高めていくのか，世界に誇るためには常に最高レベルのものを維持しなければいけない，そういうトップレベルをどのように維持するか等々，様々な御提言もあったかと思います。

そういったことを踏まえて，また来週，来週お越しいただけない方も一，二いらっしゃるかもしれませんが，場合によっては今日の議論を踏まえて，来週御出席になれないで，それで終わりになる可能性もあるので，もし今日の後，お気づきの点があれば，メモなり，メールなり，どんな手段でも結構でございます。お電話でも結構です。お気づきの点，追加の点，ございましたらどうぞ，御遠慮なくお伝えいただければと思います。また来週の結果につきましては，来週お越しいただけない方も含めて，全員にはとりあえずの結論，方向性を御報告したいと思います。

それでは時間も過ぎましたので，今日の会合はこれでお開きとさせていただきます。ど

うもありがとうございました。

―― 了 ――